

新発明のマクラ

「やれやれ、なんとか大発明が完成した」

小さな研究室のなかで、エフ博士は声をあげた。それを耳にして、おとなりの家の主人がやってきて聞いた。

「なにを発明なさったのですか。見たところ、マクラのようですが」

そばの机の上に大事そうに置いてある品は、大きさといい形といい、マクラによく似ている。

「たしかに、眠る時に頭をのせるためのものだ。しかし、ただのマクラではない」

と、博士はなかをあけて、指さした。電気部品が、ぎっしりとつまっている。おとなりの主人は、目を丸くして質問した。

「すごいものですね。これを使うと、すばらしい夢でも見られるのでしょうか」

「いや、もっと役に立つものだ。眠っていて勉強ができるしかけ。つまり、マクラの

なかにたくわえてある知識が、電磁波の作用によって、眠っているあいだに、頭のなかに送りこまれるというわけだ」

「なんだか便利そうなお話ですが、それで、どんな勉強ができるのですか」

「これはまだ試作品だから、英語だけだ。眠っているうちに、英語が話せるようになる。しかし、改良を加えれば、ほかの勉強にも、同じように使えることになるだろう」

「驚くべき発明ではありませんか。どんななまけ者でも、夜、これをマクラにして寝ていさえすれば、なんでも身につけてしまうのですね」

おとなりの主人は、ますます感心する。博士は、とくいげにうなずいて答えた。

「その通りだ。近ごろは、努力をしたがらない人が多い。そんな人たちが、買ったがるだろう。おかげで、わたしも大もうけができる」

「ききめが本当にあるのなら、だれもが欲しがるとはきまっていますよ」

「もちろん、ききめはあるはずだ」

おとなりの主人は、それを聞きとがめた。

「というと、まだたしかめてないのですか」

「ああ、わたしはこの研究に熱中し、そして完成した。しかし考えてみると、わたし

はずで英語ができる。だから、自分でたしかめてみることに、できないのだ」

と、博士は少し困ったような顔になった。おとなりの主人は、恥ずかしそうに身を乗り出して言った。

「それなら、わたしに使わせて下さい。勉強はめんどうくさいが、英語がうまくなりたいたと思っていたところです。ぜひ、お願いします」

「いいとも。やれやれ、こうすぐに希望者があらわれるとは、思わなかった」

「どれくらい、かかるのでしょうか」

「一カ月ぐらいで、かなり上達するはずだ」

「ありがとうございます」

と、おとなりの主人は、新発明のマクラを持って、うれしそうに帰っていった。しかし、二カ月はどたつと、つまらなそうな顔で、エフ博士にマクラを返しにきた。

「あれから、ずっと使ってみました、いっこうに英語が話せるようになりません。もう、やめます」

博士はなかを調べ、つぶやいた。

「おかしいな。故障はしていない。どこかが、まちがっていたのだろうか」

だが、ききめがなければ、使い物にならない。せつかくの発明も、だめだったよう

